

〈宗教〉で〈幻想〉を語る——雑誌『幻想文学』研究序説

茂木 謙之介

1. はじめに

本稿の目的は、雑誌『幻想文学』における〈宗教〉¹言説の検討を通して、1980年代から2000年代に流通した当該雑誌の性格の一端を明らかにすることにある。

〈幻想文学〉という脱ジャンルのなジャンルを扱う研究批評誌である『幻想文学』は、同時代の種々の文学・文化研究の学知と密接不可分な雑誌であり、その分析のためには雑誌に内在する多ジャンルにわたる諸言説を丹念に解きほぐしていく必要がある。本稿ではそのような諸言説の中でも同誌の中で多数確認され、同時代にも一種の流行を見ていた〈宗教〉にかかわる言説から同誌の在り様を明らかにしたい。1982年に創刊され、2003年に終刊した『幻想文学』は、1980年代のいわゆる「ニュー・アカデミズム」の隆盛、文学研究におけるポスト構造主義の定着、1990年代におけるオウム真理教事件、出版メディアの落日、そして〈宗教〉概念の相対化といった、同時代事象と共時的なメディアであり、〈宗教〉というキーワードでの分析は同誌の歴史性を取り出すものとなるだろう。

なお、管見の限りこれまで雑誌『幻想文学』については当事者の回想等を除いて研究対象とされてはならず、本稿は同雑誌研究の嚆矢となる。

具体的な検討に入る前に、雑誌『幻想文学』に関して、そのメディア的な特徴を明らかにしておきたい。

同誌の発行期間は1982年4月～2003年7月、総巻数は全67巻、別巻は全9巻、季刊で判型はA5判、平均ページ数は208ページである。発行部数は別冊等で10000部などあるものの、通常号は4000部となっている²。編集人は現在アンソロジストとして知られる東雅夫であり、発行人は東による1号、2号を除き川島徳絵となっている。なお、発行人の川島は現在も文芸評論家として知られる石堂藍であり、同誌に継続的にテキストを提示し続けた一人でもある。発行所は1982年4月の1号から1994年1月の40号までは早稲田大学幻想文学会を母体とする幻想文学出版局だったが、1994年7月の41号から2003年7月の67号まではアトリエOCTAとなっている。定価は右の【表】のとおりである。

誌面内容は、インタビュー・対談・論文・評論・随筆・翻訳・翻刻・書評・文献紹介・小説・絵画・投稿欄などとなっている。誌面内容の一例として、1986年7月発行の第15号をみてみよう。同号では特集として「大江戸ファンタスティック」が掲げられ、近世における〈幻想文学〉が論じられている。

1 本稿における〈宗教〉とは、宗教学的な素材、および宗教学知の対象物を指すものとする。

2 発行部数については、東雅夫／一柳廣孝／吉田司雄「『幻想文学』とその時代」(『幻想文学、近代の魔界へ』ナイトメア叢書②、青弓社、2006)における東の証言をもととしている。

【表】『幻想文学』における定価の推移

| 号数(発行年月) | 定価 |
|--------------------------------|-------|
| 1号(1982年2月) ～23号(1988年7月) | 980円 |
| 24号(1988年10月)、 25号(1989年3月) | 1200円 |
| 26号(1989年6月) ～31号(1991年2月) | 1230円 |
| 32号(1991年10月) ～66号(2003年3月) | 1500円 |
| 67号(2003年7月) | 1800円 |

目次に続く口絵ではグラビア「幻想の絵画から」で幻想絵画や映画の紹介がなされ、高橋克彦「幽霊画の世界」(論考)、編集部編「浄瑠璃変化抄」(浄瑠璃翻刻)、松田修「人形・からくり・変幻」(論考)、郡司正勝&須永朝彦「幻妖歌舞伎評判」(対談批評)、稲田篤信編「近世怪異小説選」(小説翻刻)、稲田篤信「近世怪異考」(論考)、高田衛「女妖白蛇抄」(論考)、須永朝彦編「読本妖異抄」(読本翻刻)、須永朝彦「怪異譚から伝奇小説へ」(論考)、川村湊「江戸随筆の幻想空間」(論考)、鎌田東二「奇童たちの家」(論考)、諸星翔編「大江戸幻想ブックガイド」(文献紹介)、
「幻想ブックレビュー」(文献紹介)、齊藤慎爾「Fantastic Editors④」(インタビュー)、
稻生平太郎「不思議な物語⑥ 甲虫」(論考)、菊地秀行「シネマ幻想館⑬」(論考)、
田中浩一「サイキック・ミュージック講座⑦」(論考)、渋谷章「連載評伝⑮ ハガード、ハガード!」(論考)、笠井潔「日本幻想作家論④ 国枝史郎」(論考)以上に加え、読者投稿、編集後記が付されている。

かかる誌面構成は変更を蒙りつつも継続していく。内容の中でも翻訳・翻刻に関しては1980年代後半以降、増加の傾向があり、創作に関しては1990年代以降、増加の傾向を確認することができる。

続けて、同誌の編集方針はいかなるものだったのかを確認したい。創刊号「編集後記」で東は以下のように述べている。

荒俣氏も述べておられるように、日本の幻想文学シーンにおける〈テキストの豊富と研究・批評の貧困〉という事態は、依然として続いているようです。一方で気の早い人々の間では〈幻想ブーム〉の風化といったことすら囁かれはじめています。内実を取り落したまま、そんなに急いでどこへゆくというのか——そんな今だからこそ、あえて「幻想文学」を名のります。³

ここではまず、「〈幻想ブーム〉」の中で取り落とされたものとしての「研究・批評」を遂行する意思を読むことができる。発行所・アトリエOCTAのホームページにおいても「日本で唯一の総合的な幻想文学研究・批評誌。さまざまなテーマをめぐり、資料的価値の高い徹底特集を企画」⁴したと述べられているなど、この編集方針は明確である。なお、同誌の読者から複数回にわたって原稿を寄せる執筆者となっていた評論家の長山靖生も「最初に受けた印象は、どこかの大学の研究室ないしは学会内の研究会有志の手になる研究誌」⁵と回想しているように、研究・批評誌としての位置づけはある程度読者や執筆者にも共有されていたと考えられる。

加えて先の引用部で注目しておきたいのは、荒俣宏の名である。東雅夫、一柳廣孝、吉田司雄の対談で東は以下のように述べている。

当時、怪奇幻想文学啓蒙の先頭に立っていらした荒俣宏さんが、七〇年代なかばくらいから、次第にオカルティズムの方へ傾斜を深めていきますよね。(略)荒俣さんが取られた方向性は実に正しい選択だったと思うのですが、ただ根がひねくれているもので(笑)、あんまり「さあオカルトだオカルトだ」と

3
「編集後記」『幻想文学』1号(1982年4月)

4
アトリエOCTA ホームページ [http://www.atelierocta.com/pages] 2017年6月2日閲覧

5
長山靖生「『幻想文学』の頃」(『ホラー・ジャパネスクの現在』ナイトメア叢書①、青弓社、2005)

旗を振られると、逆に「それなら後続の俺たちは、逆に文学にとことん、こだわってみようじゃないの」と。要するにおなじことをやってもかないっこないからですが(笑)、自分たちなりの独自性をもってやりたいなと漠然と思っていたところがありますね。⁶

6

前掲東・一柳・吉田2006

1973年から1974年にかけて荒俣宏および紀田順一郎の手によって編集されていた『幻想と怪奇』(三崎書房のち歳月社)は、「創刊の辞」で「欧米の怪奇幻想文学は、小説形式のうちでも最も特異かつ純粋なジャンルであるが、これまでわが国への紹介は必ずしも満足なものではなかった」と述べている通り、ヨーロッパを中心とした「怪奇幻想文学」の翻訳紹介を行った雑誌として知られているが、雑誌『幻想文学』もまた研究・批評誌としての様相を備えるものであり、編集者による自己認識の背景にはこの文脈があったことが窺える。

では、そのような研究批評誌としての『幻想文学』は誰に読まれていたのだろうか。「編集後記」および読者投稿欄からは、すくなくとも「編集者が想定していた読者層」は推測可能である。1984年3月発行の6号における投稿欄「読者から」では、17歳の読者が以下のような言説を提示している。

食わず嫌いではないのですが、ただでさえ暗い幻想純文学に、難解な古代人の思想と複雑な言語の象徴的手法をミックスレジュースにしたようなこの世界！ その世界と海外の幻想文学の世界の両方を器用に特集する編集部の人たちは一体どういう風に両立させているのだろうか。⁷

7

「読者から」『幻想文学』6号(1984年3月)

同号の読者投稿欄には他にも3名の読者投稿が掲載されており、それぞれ20歳、24歳、24歳となっている。また1989年3月の25号「編集後記」において「本誌に寄せられる愛読者カードの中心となっている17～20歳前後の世代」とのべられていることから、少なくとも1980年代においては若年の読者が受け手の中心として設定されていたことがわかる。なお、最終巻の67号の読者投稿欄では、当時鏡花研究者として知られていた清水潤が同誌の鏡花特集について「アレがなければ、良くも悪くも現在の自分にはなかったと思います」⁸と述べているなど、実質的に研究者の入門書としての位置づけがあり得ていたといえるだろう。

8

「幻想倶楽部」『幻想文学』67号(2003年7月)

では、編集者と寄稿者にとって、〈幻想文学〉ジャンルとかかる雑誌の位置づけはどうなっていたのだろうか。東は前掲の対談で以下のように述べている。

幻想文学ってとても幅広いジャンルじゃないですか。サブジャンルに限ってもホラーもあればファンタジーもある、SFもあれば伝奇ロマンもある。いやしくも総合的な幻想文学研究誌をめざすからには、そうした幻想文学の多様性をなるべく満遍なく採りあげていきたいと思ったんですね。(略)ラヴクラフト特集が受けたからといって、安易に柳の下の泥鰌は狙わないぞ、と(笑)。⁹

9

前掲東・一柳・吉田2006

ここからはジャンルのもつ多様さについて極力間口を広げた編集を志していたことが読み取れるだろう。また、寄稿者であった長山靖生は幻想文学について

「サブ・ジャンルのなかに偏在しながら、時代や文芸思潮によってさまざまに語られ、また分断されて」おり、それを「まとめ育てた雑誌『幻想文学』の功績」を評価するとともに、「バブル経済とポスト・モダニズムの誤読的流行の際にも、のんしゃらんにならずに非時代性をつらぬいた」として、同時代の状況から同誌が距離を持っていたことを述べている¹⁰。

この、〈幻想文学〉というジャンルの多様性を体現する雑誌としての在り様と、雑誌の時代状況からの超然性の主張については、現在における同誌の位置づけに共通したものであると考えられるが、それは具体的な史料を通して検討を要するものと思われるため、追って俎上に載せたい。

以上の書誌的な確認を踏まえ、次章以降『幻想文学』における〈宗教〉言説について具体的に検討を行いたい。なお、同誌では創作者による言説と研究・批評者による言説のそれぞれにおいて〈宗教〉言説を看取することができる。それら創作の技法として呼び込まれるものとしての〈宗教〉と読みのコードとしての〈宗教〉は、ともに同時代の同一雑誌において共存していたものであり、創作者は同時代の読みのコードを意識しつつテキストを生成し、読者はその技法を認知しつつ読みのコードを共有していたと考えられ、それらは同じ場において相互往還的に作用していたものと考えられる。それを念頭に、以下創作者の言説と研究・批評者の言説における〈宗教〉、そして〈宗教〉言説の中でも宗教学と宗教学者にかかわるものについて、それぞれ検討を試みたい。

2. 創作に関わる〈宗教〉

かかるインタビューは研究・批評誌としての自己認識を持つ同誌において一種のオーラル史料として位置付けられていたと考えられる。

まず手始めに検討を行いたいのは、〈幻想文学〉と呼ばれる創作テキストの生成者たちの言説における〈宗教〉についてである。雑誌『幻想文学』では、主にインタビューという形で創作者たちの言葉が記録されている¹¹。

創作者たちの言説に織り込まれる〈宗教〉としては、宗教人類学・宗教民俗学の対象となるものとともに、宗教学知に連関するものが見受けられる。以下、それぞれに分類しつつ、その特徴を明らかにしたい。

2-1. 宗教人類学・宗教民俗学的対象と〈宗教〉の流行

宗教人類学的対象としてまず確認することができるのは「神話」に関するものである。1982年の第1号には「ブックインタビュー」として『唐草物語』を上梓したばかりの作家・澁澤龍彦が登場し、「道教や神仙思想とその歴史というのは面白い」と述べている¹²。幻想小説生成の論理として、「神話」にかかわるものがあることが雑誌の発刊すぐの段階から提示されていることがわかる。後述するが、澁澤は作家・中井英夫とともに「幻想文学新人賞」の審査をつとめるなど同誌にとって精神的支柱となった人物であった。

かかる「神話」に関する記事はほかにも確認することができる。

「一書一会＝ブックインタビュー 澁澤龍彦」『幻想文学』1号（1982年4月）

1982年11月の2号に掲載されたインタビューで『抱擁』を著した直後の日野啓三は、若手の読者の想像力について以下のように述べる。

「銀河鉄道999」かな、蒸気機関車がスーと昇っていくとこのイメージなんかいいしね。それに結局あれは機械の体をもって不死になるか、それとも肉の身体で死ぬかという人類の大問題を扱ってるんだよね。途中に入る挿話でも、海賊になって出て行った息子を待つ母親だとか、かつて神話叙事詩がやって来たような、我々の心の最も深いところにあるものを実に大胆にどんどん使っているね。¹³

13

「一書一会＝ブックインタビュー 日野啓三」
『幻想文学』2号（1982年11月）

アニメーションを経由しつつ神話について、人間に共通するコードとして位置付け、それが同時代読者に共有されており、それを背景にテキストが生成されている状況に言及している。この傾向がより強固なのは1989年6月の26号に掲載された、ファンタジー長編『空色勾玉』を上梓した直後の荻原規子の言説である。

荻原 日本神話がこれまで取り上げられることがなかったのはタブー視されていたという一面もあると、後で聞いて。そういうことも知らずに書いていた。六十歳すぎのおじいさんから、日本の神話をよくぞ復活してくださったという手紙を貰ったりして。手紙もあんまりひどいのはなかったけど、とにかくそういう認識もないで書いていた。日本神話に関しては取り上げる余地がまだ随分あると思う。¹⁴

14

「可能性としての女性たち—明日のファンタジーのために—」『幻想文学』26号（1989年6月）

自己言及的に指摘されているように、同時代ナショナリズムとの緩やかな接続可能性があることは明快であり、それは改めて検討されるべきことでだが、少なくとも、かかる「神話」という〈宗教〉に関するコードが同誌においてある程度通時的に確認することのできるものとは言いうるだろう。

続いて宗教人類学にかかわるものとしては、シャーマニズムに関する言及を挙げることができる。1984年6月の7号で神沢利子は以下のように「シャーマニズムに関心」があることを述べる。

私もシャーマニズムには関心を持っています。実は今、連載を終えて手を加えてる作品があるんですが、それがシャーマンが出てくる話なんですよ。あまり大したシャーマンではないので、もっとすごいシャーマンにしなければならぬのがつらいところなんです(笑)。¹⁵

15

神沢利子「クマと北斗とシャーマニズム」
『幻想文学』第7号（1984年6月）

同インタビューで神沢は『シベリアの狩猟民族の狩猟儀礼』なる書物にも触れ¹⁶、そこで得たシャーマニズムに関する知識が創作に反映していることを証言している。

16

確定はできないが、E. ロット＝ファルク／田中克彦ほか訳『シベリアの狩猟儀礼』（弘文堂、1980〔1953〕）のことで推測される。

次に宗教民俗学の対象に関するものをみてみたい。例えば1983年11月5号で半村良は以下のように「民間伝承」に触れる。

民間伝承ということに関して一つ気がついてるのは、仏教渡来以前の民話と

17

半村良「インタビュー 名もなき庶民の夢語り」『幻想文学』5号(1983年11月)

いうのはとても魅力的だということね。仏教が入ってくると、怖くなくなっちゃうんですよ。なぜかという仏教的な“下げ”が付くから。理由づけされちゃうのね。¹⁷

18

「編集部から」『幻想文学』第7号(1984年6月)

一読して、既成宗教の枠組みにまだ囚われないものとして「民間伝承」を位置づけ、それを積極的に評価していることが看取できるだろう。また第7号では、三木卓の「アニミズムがぼたぼた」や鎌田東二の「運動場体としての少年身体」といったテキストが同様の日本の土着的な文脈に触れており、同号の「編集後記」でも以下のように言及されている。

インタビューを終えて、何より印象に残ったのは、日本のファンタジーに脈打つアニミズムの活力だった。かつて蔑称として用いられていた「呪術者の群れ」という言葉は、今まったく新たな輝きを放って蘇ろうとしている¹⁸

19

松谷みよ子「日本人の血の中にある彼ら」『幻想文学』43号(1995年2月)

ここでは「日本のファンタジー」の前提として「アニミズム」があることが自明のものとして提示されているとともに、「「呪術者の群れ」という言葉」がポジティブなものとして認識されている「今」があるという現状認識が提示されている。この語りの現在時としての「今」というものを考えたとき、注目すべきなのは1980年代から1990年代にかけての〈宗教〉の「流行」という状況である。

20

須永朝彦「地獄巡りの系譜」『幻想文学』43号(1995年2月)

1995年2月の『幻想文学』43号で松谷みよ子はインタビューアーに「最近の臨死体験ブームみたいなもの」について尋ねられ「結構なことだと思っています」と応答している¹⁹。この43号の特集は「死後の文学」と題し、他にも臨死体験を扱った須永朝彦²⁰や井辻朱美²¹といった同誌常連の手によるテキストが多数含まれている。同時代に生起していた臨死体験を含めた〈宗教〉の流行については、井上順孝²²や島蘭進²³らによる諸研究に詳しいが、そのような状況と雑誌のコンセプトとの相互連関性を看取することができる。ほかに1999年2月の54号では「世の終わりのための幻想曲」として世紀末の〈滅亡〉をテーマに特集が組まれており、1970年代の五島勉の著作に端を発する日本に於ける終末言説の流行を決算させるような、世紀末をめぐる話題が誌面を賑わせていたことも見逃してはならないだろう。つまり、ここではテキストの生成時と同時代に生起していた社会的な文化現象に隣接した編集が行われていたことが明らかであり、これまでになされてきた回想等における、同誌が時代に超然としていたという語りにとどまらないものが展開していることが指摘できよう²⁴。

21

井辻朱美「生きて帰りました物語」『幻想文学』43号(1995年2月)

22

井上順孝『新宗教の解説』(筑摩書房、1992)

23

島蘭進『ポストモダンの新宗教—現代日本の精神状況の底流』(東京堂出版、2001)

24

だが、これらの〈宗教〉言説と『幻想文学』の連関については、端的に流行していたという同時代状況に帰着させてしまうととどまらないものもあるかもしれない。オカルト・スピリチュアリティとサブカルチャーの親和性は夙に論じられてきたものであり、それらと〈幻想文学〉の連関は一考に値するだろう。

2-2. 宗教学知の導入

このような同時代文化現象、とりわけ〈宗教〉をめぐるものを考えたとき興味深いのは、創作者の言説に埋め込まれた、宗教学をはじめとする〈宗教〉に関する学知である。

1987年10月の20号では「幻想ベスト・ブック1982~1987」として様々の人びとによるブックレビューが掲載されているが、そこでは例えば作家の宇井亜綺夫

が宮田登『妖怪の民俗学』、小松和彦『異人論』、谷川健一『白鳥論』の書名を挙げ、森真砂子は荒俣宏『本朝幻想文学縁起』を挙げた後「続いて鎌田東二の『オカルト・ジャパン』を併せ読めば、人生観が変わること、受け合います」と述べている。

1988年10月の24号でも天沢退二郎が「ここ数年間、民俗学や文化人類学の方面で“異人”ブームみたいなのがあって、小松和彦さんや赤坂憲雄さんの本が出て、僕なんかも面白く読んでいます」と述べているほか²⁵、1994年1月の40号では作家・新井紫都子がベストブックにエリアーデの『世界宗教史』を選択し、「ノートを取りながら読んで行っても、今回その統一性を眼前に見ることはできませんでしたが、“ここにもあれの根っこがある」という大小さまざまな発見と同意をいくたびも味わいました」と述べているなど²⁶、宗教人類学・宗教民俗学をはじめ、宗教史学や宗教社会学の成果と同誌における言説が関わり合う傾向を看取することができる。

また1994年7月の41号では、作家の菊地秀行と竹河聖の対談において坂東眞砂子の『死国』および『狗神』が俎上に載せられ、以下のようなやり取りが交わされる。

竹河 今大分資料が増えたでしょ、小松和彦さんあたりが一生懸命やってるから、書くには書きやすい状況になってますよね。

菊地 民俗学の本なんて一冊読むとアイデアがいっぱい浮かぶもんな、あっこれはいい、これは使える、これは受けそうだと(笑)。²⁷

ここでは札所巡りと狗神憑きという、共に民間信仰にかかわる小説の生成をめぐって、民俗宗教に造詣の深い小松和彦の名が挙げられ、それら宗教民俗学的成果が創作に「使える」という認識が示される。なお同号では、作家・篠田節子へのインタビューにおいても、以下のように担当編集者が宗教学出身であり、その知識を参照した小説生成がなされていることが証言されている。

実は打合せのとき、担当編集者の方が二つ条件を出してきたんですね。一つは宗教をテーマにしたものを書け、もう一つは通俗的な愛は書くなと(笑)。(略)なにしろ宗教社会学専攻の京大出身の方でね、ルネ・ジラルの『生贄の山羊』という本を持ってきて「この線で行きましょう、ぼくの卒論のテーマですから、これについては僕も助言できますから」と言ってそれを読ませたんですから(笑)²⁸

これらにおいて宗教学知は創作に対して単なるきっかけのレベルにとどまらず、より踏み込んだテキスト生成のヒントともなっている言説が看取されるだろう。では、その創作テキスト生成のヒントとしても扱われていた〈宗教〉は、研究・批評誌としての自己認識を持つ『幻想文学』における批評および研究言説においてはどのように作用していたのだろうか。

25

天沢退二郎「賢治幻想譜」『幻想文学』24号(1988年10月)

26

「幻想ベストブック1987-1993」『幻想文学』40号(1994年1月)

27

菊地秀行vs竹河聖「われらの恐怖遍歴」『幻想文学』41号(1994年7月)

28

篠田節子「人間意識の怪奇」『幻想文学』41号(1994年7月)

3. 批評・研究に関わる〈宗教〉

3-1. 紹介文献の中の〈宗教〉

批評・研究にかかわる〈宗教〉として、雑誌の記事内容の四分の一程度を占める書評欄「幻想ブックレビュー」を見逃すことはできない。同誌においては論考を提示するのみならず、恒常的に〈幻想文学〉とその隣接領域に関する書物が短い文章とともに紹介されている。例えば1986年7月の『幻想文学』15号には【日本文学】【英米文学】【諸国文学】【文学研究・評論】【哲学・心理学・宗教】【民俗・歴史・伝記】【美術・音楽・芸能】【児童文学】【コミック】【洋書】【レコード・ファンダム】のカテゴリが用意され、そのうち【哲学・心理学・宗教】においては山折哲雄『日本仏教思想論序説』、武村牧男『唯識の構造』、濱田泰三『天理教』、島津彬郎『W・B・イエイツとオカルティズム』、I・ウィルソン『最後の奇蹟—トリノの聖骸布』などが紹介されている。

これらの書評においては、基本的に紹介された文献の内容については提示されるものの、直接的に〈幻想文学〉ジャンルとの連関は語られていないことには注意が必要である。即ち、〈幻想〉と〈宗教〉両者の親和性が無前提に在ることを示していると言いうるのだ。これら宗教関連書籍のレビューは、カテゴリは「社会科学」「人文書」などに変えつつ終刊まで継続的に掲載されていく。

では、これらの〈宗教〉に関連する情報は、紙面内容にはどのようにかわるのだろうか。そこで重要になってくるのは創作テキストの読みのコードとしての〈宗教〉である。

3-2. オカルティズム・スピリチュアリティの流行

まず目立つのは1980年代から90年代にかけてのオカルティズム・スピリチュアリティの流行という状況との隣接である。先に引用した東雅夫による荒俣宏の活動についての言及においても指摘があるように、1970年代の幻想文学言説はオカルティズムとの隣接性を持っていたが、1980年代の『幻想文学』が刊行された段階でもその残滓が看取できる²⁹。創刊号の大瀧啓裕の言説³⁰および2号の荒俣の言説³¹では、オカルティストたちの思考がイエイツなどの西欧幻想文学に影響したことが指摘され、3号では同誌の思想的支柱であった澁澤龍彦について「六十年代においてはサド文学の司祭たるアナーキーな思想家として、七十年代においてはオカルティズムと博物学の先達として魔界の導者と化したこの人物」³²と呼ばれている。特に澁澤に対する言説では、「司祭」と「導者」というともに〈宗教〉的コードをあえて導入していることは注目に値するだろう。同号ではほかにも武邑光裕のテキストで神秘学に関して言及がなされ³³、1985年6月の11号では川本三郎のインタビューにおいて以下のようなやり取りが提示されている。

——今お話にでた宇宙とか神を身近に感じるということと、最近の若者の霊的なものへの関心の高まりということは結びつく？

29

なお、同時代の大量消費社会におけるオカルト文化の流行については吉田司雄編『オカルトの惑星 1980年代、もう一つの世界地図』（青弓社、2009）を参照のこと。

30

大瀧啓裕「玄甫拾遺帳（一） ゴールデン・ドーン文庫」『幻想文学』1号（1982年4月）

31

荒俣宏「フィオナ・マクラウド——スコットランド神秘主義運動の象徴」『幻想文学』2号（1982年11月）

32

「幻想純文学50選 澁澤龍彦 唐草物語」『幻想文学』3号（1983年4月）

33

武邑光裕「神秘学最前線—西洋編— 「あたらしい聖性」を求めて」『幻想文学』3号（1983年4月）

川本 一種の〈不思議大好き〉の感覚なんだろうんですけど、やっぱり子供性というか、七歳までは神のうちと云われていたようなことがもう少し敷衍されて二〇歳までは神のうちみたいな感じになってるんでしょうね。(略)今は医学が発達したけど、肉体的には寧ろ青年期になってもひ弱な感じの人が増えてるような気がする(笑)。そういう人は、無意識のうちに、死というものを身近に感じてるところがあるんじゃないかと思うんですね。それで神とか霊的なものにも惹かれるんじゃないかと。³⁴

34

川本三郎「クリティカル・インタビュー
サイレンス・フィクションの時代」『幻想文学』11号(1985年6月)

インタビューアが同時代の動向として「最近の若者の霊的なものへの関心の高まり」があることを提示した際、川本はそれを是認し、実質的に自らのテキストの読者の可能性として「神とか霊的なものにも惹かれる」若者があることを指摘しているのだ。

ほかにも1985年3月発行の10号における松岡正剛の言説では「世界神話の中にいろいろなかたちで産鉄部族の話が出て来るのに興味を持った。これはいわゆる鍛冶神の系譜に属するもので、有名なギリシャの巨人キクロプスから日本の猿田彦に到るまで」³⁵と比較神話学的な言及がなされ、1991年2月の31号の多田満智子の文章では「ギリシア神話の片隅にヘルマフロディトスというものがある。一見して分かるように、その名はヘルメスとアプロディテの合成語でこの両神の間に生まれたと言われている」³⁶とあるように、読みのコードとして神話学が特権的な地位を得ている。

35

松岡正剛「インタビュー 鉱物は生殖しない」『幻想文学』10号(1985年3月)

36

多田満智子「かのオルフェウスもいうように」『幻想文学』31号(1991年2月)

3-3. 宗教人類学・宗教民俗学の参照

同様のことは前章で宗教人類学・宗教民俗学の対象と位置付けたものについても指摘できる。1983年4月の3号の奥野健男インタビューでは太宰治のテキストとイタコの関係が「太宰の文学は巫女の文学であると。イタコに死者を降ろしてもらうときは、一方的に聞くだけでなく、こちらからも語りかけるんですね」³⁷と語られる。また、宗谷真爾は5号で日本の風土と文学テキストについて語るに際し、以下のように述べている。

庶民の豊饒への祈りが、塞ノ神＝道祖神を、この国のすみずみにまで生んだのだった。エロスと作物の豊作への祈りとが類感呪術的に同一視されたこと。それがしだいにエスカレートし、やがて伝来した仏教に結びつき、即ち密教の体系と接着し、陰陽道や山岳信仰などがひとつの坩堝に投げ込まれ、真言立川流なるエロスの宗教をかたちづかった。³⁸

37

「幻想文学における原風景 奥野健男インタビュー」『幻想文学』3号(1983年4月)

38

宗谷真爾「わが闇を狐火燃えて駆けめぐり」『幻想文学』5号(1983年11月)

ここでもいささか単純化された形で土着の宗教とテキストの生成が語られていることが看取されようが、それは直野敦がルーマニアの幻想文学についてエリアーデを参照しつつ「古くはその源泉をフォークロアの世界に持ち、19世紀後半から西ヨーロッパの文学潮流の影響も受けながら、テーマの上でも文学形式においても多様化しながら現代に及んでいる」³⁹などと述べていることとも同根であ

39

直野敦「フォークロアの水脈」『幻想文学』21巻(1988年1月)

ろう。即ちフォークロアがテキストの生成の背景として設定されており、これらはあるテキストの歴史性を問うに際して、歴史叙述の枠組みとして緩やかに運用されているのである。

このような雑誌『幻想文学』において広く展開していた、宗教学にかかわる知の枠組みとそれに準拠したテキスト群を見渡した時に気づかされるのは、宗教学者の介在である。

4. 宗教学者の介在

4-1. 宗教学者言説の導入

同誌における宗教学者の存在を考えた際、まず目につくのは宗教学者によって提示された学知の利用である。まず創刊号の段階で荒俣宏によってシラーの神智学論文への言及がなされている。

シラーの「ユリウスの神智学」っていうので、シラーが書いた神智学についての論文があるんですけど、それが読本なのね。それでね、おどろきましてね。大学はすごい、と思いましたね。高橋巖さんが、神秘学に関連して文学をやってたので、それで、まあ怪奇小説なんか読んでいても、うすうすそういう世界があるっていうのはわかるわけですよ。⁴⁰

同誌においてほかにも荒俣はインタビューに答えるに際して以下のような言説を提示している。

———神智学がラヴクラフトに及ぼした影響というのはどの程度のものだったのでしょうか？

荒俣 相当深いと思いますね。あの人の宇宙観のベースになってるのは神智学だと思ってほぼまちがいないでしょう。ただそれをあんまり露骨に出すと、解ってる人には“あつ、これはみんなここからとったんじゃないか”とか言われると困るというので、多少ごまかしてるところもあるとは思いますが。⁴¹

ラヴクラフトの宇宙観の根源を神智学に求めており、雑誌の初発の段階ですでに宗教学者による学知の蓄積が、幻想文学解釈の一つの方法として機能していることが分かるだろう。ほかにも1990年1月の28号ではフランス文学者の森茂太郎が吸血鬼について語るに際して〈幻想文学〉一般について言及し、その論理的枠組みについて宗教学者のR. オットーを導入している。

幻想小説とは「聖なるもの」(オットー)が衰弱し、神々の黄昏が決定的となったとき、まさしくこの「聖なるもの」奪還を目的として創造された文学ジャンルにほかならないのである。神秘と恐怖に対するやみがたい郷愁、これこそ幻想小説のもっとも奥深いところに巣喰う衝動なのだ。⁴²

40

「幻想文学研究の現在 荒俣宏インタビュー」
『幻想文学』1号(1982年4月)

41

荒俣宏「ラヴクラフトは『斜陽』である」『幻想文学』6号(1984年3月)

42

森茂太郎「メタファーとしての吸血鬼」『幻想文学』28号(1990年1月)

ほかに1991年2月の31号では井辻朱美が宗教学者のW. ジェイムズによる例示とファンタジー作家・C.S. ルイスのテキストとの親和性を語るなど⁴³、古典的な宗教学者の理論導入が積極的になされていたことは見逃すことができない。

4-2. エリアーデの特権性

このような〈幻想文学〉を理解するために導入された宗教学者の名のなかで、同誌において宗教史学者・M. エリアーデが特に特権的に扱われていることに気づかされる。

『幻想文学』誌にとって澁澤龍彦が精神的支柱としてあったことは既述の通りだが、澁澤には「私のエリアーデ」なるテキストがある。『エリアーデ著作集』の月報に寄せられたこのテキストでは、「エリアーデの理論によって、自分の中にある元型とイメージへの好みを確認することができたのだ」と述べているほか⁴⁴、他のエッセイでも複数回にわたってエリアーデを参照している。既に佐藤慎太郎は日本最初期のエリアーデ紹介者として澁澤があったことを指摘しているが⁴⁵、澁澤の影響もあってか、雑誌の初期から後期に至るまで、たびたびエリアーデは同誌に登場し、その著作や分析概念が参照されている。

例えば森茂太郎はラヴクラフトを検討するにあたってエリアーデの見解を提示し⁴⁶、諸星翔と石堂藍の誌上対談ではエリアーデの『鍛冶師と錬金術師』が参照され、「鉱物幻想の神話学的背景を知る上で必読の基本図書——によれば、人類が最初に出会った鉱物は、地表に落下した隕石だったとか……」⁴⁷と内容が参照されている⁴⁸。エリアーデへの言及は2000年代においても提示され、五十嵐太郎は都市への言及の際に、聖別された場所についてエリアーデの「ヒエロファニー」概念を参照している⁴⁹。

これらの記事からは、個別の宗教学者とその理論が〈幻想文学〉を語るに際して召喚されているという状況を確認することができるが、そこで同時に目につくのは、宗教学の諸理論を運用しつつ議論を展開する、執筆者としての宗教学者である。

まず、1983年7月の4号では水神祥という人物による「日本的霊性」についての講演「神秘学最前線—日本編—」が掲載されている。この「水神」は宗教学者・鎌田東二の筆名であり、鎌田は他にも1985年3月の10号において宮沢賢治の鉱物への創造力を論じるなど⁵⁰、その執筆は1995年前後まで多数確認される。

1984年3月の6号では直野敦と中沢新一が対談し、エリアーデの小説へのタントラの影響が論じられるとともに、「タントリズムのやり方だとその間にステップがいくつもありますからね。その辺エリアーデが体験したことと、タントラ文献を読んで知れたことというのが見事に融合されていて、その意味でも面白い作品」などタントラの実践者としての中沢の発言を確認することができる⁵¹。

外にも1991年2月の31号では宗教民俗学者の川村邦光がアンドロギュヌスのもつ聖性がシャーマンに継承されていると論じるなど⁵²、宗教学者の誌面への登場は1990年代序盤にかけて盛んであるといっても差し支えないだろう。

43

井辻朱美「名前のファンタジー」『幻想文学』31号（1991年2月）

44

澁澤龍彦「私のエリアーデ」（『月報』『エリアーデ著作集』第6巻、せりか書房、1973）

45

佐藤慎太郎「日本におけるエリアーデ宗教学の意義と貢献」『論集』第33号、2006年

46

森茂太郎「フランスにおけるラヴクラフト」『幻想文学』6号（1984年3月）

47

諸星翔＋石堂藍「鉱物幻想100景」『幻想文学』10号（1985年3月）

48

なお、2016年11月に筆者が実施した東雅夫へのインタビューで、諸星翔とは東の筆名であるとの証言を得た。

49

五十嵐太郎「幻想としての宗教都市」『幻想文学』62号（2001年11月）

50

鎌田東二「鉱物幻想群像 意思の密儀」『幻想文学』10号（1985年3月）

51

直野敦vs中沢新一「民話とタントリズム」『幻想文学』6号（1984年3月）

52

川村邦光「アンドロギュヌス＝シャーマンの民俗」『幻想文学』31号（1991年2月）

4-3. 補強と破綻

この背景を考えるに際して有効であると考えられるのは、小説家かつ宗教学者の椿實によって書かれた中井英夫への追悼文である。中井は澁澤と並んで同誌の精神的支柱であり、1993年に死去している。そこで椿は以下のように述べる。

エリアーデの幻想小説以来、この宗教学者によって、宗教学と幻想文学の境界がなくなったのは有難いことである。(略)このごろジョルジュ・バタイユの宗教史について発表する人もあり、エリアーデの世界宗教史は幻想小説一覧にも含まれている。だから中井英夫の「虚無への供物」とは宗教学的には何ぞやと問うても領海侵犯ということにはなるまい。⁵³

一読して明快なように、エリアーデが特権的に語られつつ学問場における領域横断の状況とともに、幻想文学と宗教学の親和性が語られている。この椿の言明を鎌田らの具体的なテキストは実質的に補強していたといえることができるだろう。

しかし、1995年のオウム事件以降、決して明示はされないものの、宗教学者たちの寄稿は激減することになっていく。先ほどまでに確認したように、創作をめぐるヒントとして、またテキストを読むに際しての論理として宗教をめぐる言説はあり続けていたが、宗教学者の再度の寄稿は2000年代を待つこととなる。

2000年代における宗教学者の言説として見逃してはならないのは終刊間近の2002年の65号特集「神秘文学への誘い」に掲載された鶴岡賀雄「神秘主義とは何か」である。

ファンタスティックとかミステリアスとか言って自分でめり込んで分にはいいんですけど、いささか学問的に言葉を使おうとすると、その概念がそもそもどういふふうに出てきたのかということを自覚しないと、「神秘主義」にしても「オカルティズム」にしても、ひいては「文学」にしても、あまり安易には使えなくなっているというのが現状です。

これまでの1990年代までの「幻想文学の読みの論理としての宗教」という状況はこの相対化言説の提示によって破綻をきたしたといっても差し支えないだろう。1990年代以降、〈文学〉と〈宗教〉の概念自体が相対化されていったことは周知のとおりだが、まさに概念の相対化がなされたとき、研究・批評誌としての雑誌『幻想文学』が拠って立つジャンル自体の自明性もまた失われていくのだ。もちろん、この鶴岡の言説が雑誌の生命を絶ったわけではない。しかし、極めて示唆的なものとしてこのテキストはあったとはいい得るのではないだろうか。

5. おわりに

以上、雑誌『幻想文学』における〈宗教〉言説について検討を試みてきた。『幻想文学』における〈宗教〉とは、少なくとも1990年代までは創作のヒントとして、

また批評研究の解釈格子として在り得るものであった。それは、多様性を孕む〈幻想文学〉という、自立を希求する文学ジャンルと、そこに枠組みを与える〈宗教〉との無意識的な共闘の歴史としても位置付けることができるかもしれない。いわば〈幻想〉を仮構し、〈宗教〉によってその内実の一部を補強していたと言えるのではないだろうか。

同時にこの『幻想文学』の検討を通して、我々は1980年代から2000年代の文学研究と宗教研究の連関について、“研究批評誌”というメディアの持った可能性を見出すことができるのではないだろうか。〈幻想文学〉という脱ジャンルのなジャンルを扱うに際して、中沢新一の寄稿から看取されるようにニュー・アカデミズムとの隣接を持ちつつ、一種教養主義的なアプローチやサブカルチャーとの関連を論じる同誌は、常にその「研究・批評」の方法として様々の理論を要請していたといえる。その中で選取られたものの一つとして〈宗教〉はあったが、同時期に生起していた概念の相対化はそれを受け止める素地の地滑りとしてもあったといえる。裏を返せば、それは領域横断的なジャンルにかかわる雑誌メディアの可能性として改めて検討すべきものとしても立ち現れてくるのではないだろうか。

本稿においては、〈宗教〉を切り口として同誌を論じたが、雑誌『幻想文学』の脱領域的な試みと、その同時代的な意義については他ジャンルとの切り結びを個別具体的に検討し、多角的に論じることで、その全体像はより立体的になってくると考えられる。別稿を期したい。